

平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

題字 松井一實
広島平和文化センター会長



サミットに向け花を育て飾った子どもたち(提供 広島市立中島小学校)



歓迎ボード “G7 HIROSHIMA”

目次

写真「サミットに向け花を育て飾った子供たち (提供 広島市立中島小学校)」……………	①	G7広島サミットジュニア会議 参加者が広島から世界に発した声 参加者をガイドしたユースピースボランティアの印象 ……………	⑤
「G7広島サミットを終えて」 広島平和文化センター 理事長 香川 剛廣 ……………	②	「市民の声はG7首脳に届いたか」ピースボート 共同代表 島山 澄子 ……	⑥
G7広島サミット 各国政府首脳メッセージ ……………	③	被爆体験証言者、被爆体験伝承者及び家族伝承者の委嘱/ 「やさしい日本語」講座を開催しました ……………	⑦
「若者主体の3つの平和イベントがもたらした春の開花」 広島市立大学広島平和研究所 教授 ロバート・ジェイコブズ ……………	④	「ウチもワシも 広島市民じゃけえ!!カマルさん(ネパール)/ 広島市・安芸郡外国人相談窓口をご利用ください/ 「広島留学生基金」にご協力を ……………	⑧



G7広島サミットを終えて

広島平和文化センター 理事長
香川 剛廣



理事長 香川剛廣

5月19日から21日、G7広島サミットが開催され、バイデン米大統領、マクロン仏大統領を始めとするG7各国首脳に加え、インドや韓国など8か国の招待国の首脳、国連などの国際機関の長、さらにはウクライナのゼレンスキー大統領も参加する歴史的な会合となりました。参加された全ての首脳は、岸田総理ご自身の案内で平和記念資料館を訪問し、原爆死没者慰霊碑に参拝、献花され、被爆者の体験や話にも耳を傾けられました。慰霊碑参拝の際には、松井広島市長から碑文や原爆ドームに関する説明を受けて、被爆の実相に直接触れる貴重な機会となりました。深く感銘を受けた、決して忘れられないと話す首脳がいるなど、世界の指導者に大きなインパクトを与えたことは間違いありません。

G7各国首脳が芳名録に記帳された内容を見ると、核兵器のない世界の実現に向けて、真摯に努力していかねばならない、という指導者としての責任を率直に述べています。世界の政治指導者として、一人の人間として、平和を願うヒロシマの心に触れ、二度と核兵器は使われてはならない、との思いを深めたものと思います。

また、今回のG7サミットには、インド、ブラジル、インドネシアなどグローバルサウスと呼ばれる諸国も招待されました。これらの国の外交的立場は様々ですが、世界への影響力は年々大きくなっています。これらの国の首脳が初めて被爆の実相に触れ、核兵器廃絶を祈念するヒロシマの心に触れたことには大きな意義を感じます。

韓国の大統領も初めての訪問でした。日韓の首脳が共に韓国人原爆犠牲者慰霊碑に参拝したことは、韓国

人被爆者にとっては長年の思いが実現したのもであり、特筆すべきことでした。

また、ロシアから侵略され、核の威嚇を受けている、ウクライナのゼレンスキー大統領が広島に来られ、被爆の実相に触れ、各国首脳と会談したことにも大きな意義を感じます。市民の平和な日常や人間の生存を脅かす武力による侵略、核による威嚇を、ましてや核の使用を決して許してはいけません。一日も早い侵略戦争の終結とウクライナの復興のためにG7始め国際社会は努力していくべきです。

G7広島サミットでは、「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」という独立の文書を初めて作成、発表されました。核兵器禁止条約への言及がないなどの批判はありますが、核兵器国始め、広島に集った全ての国が同文書に盛り込まれた核軍縮、不拡散の取り組みを進めるように、そしてそれが、核兵器なき世界を目指す具体的な政策、行動に結びついていくように、世界の市民の声を結集し、働きかけていきたいと思います。

今回のG7広島サミットにより、世界の関心が被爆地広島に集まりました。広島が取り組んできた平和運動にとって、最大のチャンスであり、新たなスタートです。今後世界中からより一層多くの人々、特に若い世代に広島を訪れてもらい、被爆の実相を伝えていきたい、市民レベルの交流を深めていきたいと思います。そうした一人一人の市民の平和の連帯を世界に広げ、強化していくこと、広く市民社会に平和文化を根付かせていくことこそ、一国の政策を変え、世界を変えていくことに繋がると信じて努力していきますので、広島平和文化センターへのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。



慰霊碑に献花した G7 各国首脳



G7 各国首脳に説明する松井市長

(写真出典：外務省ホームページ)

各国政府首脳メッセージ



平和記念資料館見学後に記帳するG7各国首脳

G7各国首脳

岸田文雄^{きしだふみお} 内閣総理大臣

歴史に残るG7サミットの機会に議長として各国首脳と共に「核兵器のない世界」をめざすためにここに集う

エマニュエル・マクロン フランス大統領

感情と共感の念をもって広島で犠牲となった方々を追悼する責務に貢献し、平和のために行動することだけが、私たちに課せられた使命です。(仮訳)

ジョセフ・バイデン 米国大統領

この資料館で語られる物語が、平和な未来を築くことへの私たち全員の義務を思い出させてくれますように。世界から核兵器を最終的に、そして、永久になくせる日に向けて、共に進んでいきましょう。信念を貫きましょう！(仮訳)

ジャスティン・トルドー カナダ首相

多数の犠牲になった命、被爆者の声にならない悲嘆、広島と長崎の人々の計り知れない苦悩に、カナダは厳粛なる弔慰と敬意を表します。貴方の体験は我々の心に永遠に刻まれることでしょう。(仮訳)

オラフ・ショルツ ドイツ首相

この場所は、想像を絶する苦しみを思い起こさせる。私たちは今日ここでパートナーたちとともに、この上なく強い決意で平和と自由を守っていくとの約束を新たにします。核の戦争は決して再び繰り返されてはならない。(仮訳)

ジョルジャ・メローニ^{ジョルジャ} イタリア首相

本日、少し立ち止まり、祈りを捧げましょう。本日、闇が^{りょうが}凌駕するものは何もないということをお覚悟しておきましょう。本日、過去を思い起こして、希望に満ちた未来を共に描きましょう。(仮訳)

リシ・スナク 英国首相

シェイクスピアは、「悲しみを言葉に出せ」と説いている。しかし、原爆の閃光^{せんこう}に照らされ、言葉は通じない。広島と長崎の人々の恐怖と苦しきは、どんな言葉を用いても言い表すことができない。しかし、私たちが、心と魂を込めて言えることは、繰り返さないということだ。(仮訳)

シャルル・ミシェル 欧州理事会議長

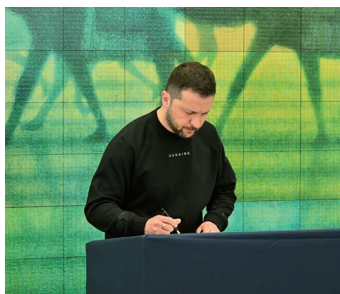
80年近く前、この地は大いなる悲劇に見舞われました。このことは、われわれG7が実際何を守ろうとしているのか、なぜそれを守りたいのか、改めて思い起こさせます。それは、平和と自由。なぜならば、それらは人類が最も渴望するものだからです。(仮訳)

ウアズラ・フォン・デア・ライエン 欧州委員会委員長

広島で起きたことは、今なお人類を苦しめています。これは戦争がもたらす重い代償と、平和を守り堅持するというわれわれの終わりなき義務をはっきりと思い起こさせるものです。(仮訳)

ウクライナ

ヴォロディミル・ゼレンスキー大統領



ゼレンスキー大統領

(平和記念)資料館の訪問に深く感銘を受けた。世界中のどの国も、このような苦痛と破壊を経験することがあってはいけない。現代の世界に核による脅しの居場所はない。(仮訳)

(写真・メッセージ出典：外務省ホームページ)

G7広島サミット公式ホームページ

(G7首脳記帳内容)

<https://www.g7hiroshima.go.jp/topics/detail014/>



(ウクライナ大統領記帳内容)

<https://www.g7hiroshima.go.jp/topics/detail056/>



若者主体の3つの平和イベントがもたらした春の開花

広島市立大学広島平和研究所 教授 ロバート・ジェイコブズ

2023年の春、G7広島サミットを契機に開催された、核兵器廃絶と世界平和の構築に向けた実践的ステップに取り組む、若者達による3つのイベントに参加する機会を得ました。世界の若者が、知性、優しさ、エネルギーを注いで21世紀の厄介な課題に取り組む姿に、私は大きな希望を感じました。

それぞれのイベントは、様々な若者コミュニティのメンバーによる、論点や活動がよく考えられたユニークなものでしたが、前の世代から引き継がれ、未だ解決をみない核問題に取り組むという意味では、同じ性格のものとも言えます。

《G7広島サミットジュニア会議》

3月下旬の3日間、G7各国にルーツを持つ日本在住の高校生24名が広島に集いました。

「平和」、「持続可能性」、「多様性」をテーマに3グループに分かれました。各グループでは、活発に意見を交わす中で合意点を見出し、一つの文書にまとめるというプロセスを重ねていきました。また、被爆の実相について学ぶ平和プログラムの後に、それぞれのテーマに沿った場所を訪問しました。それを踏まえ、さらに議論を進め、自分達が練り上げた成果文書を、最終日に、彼ら全員で堂々と読み上げました。

この文書は、認識する課題、推奨する行動、今後の行動や取組に対するコミットメントの3つのセクションから構成されています。

岸田首相に手渡された「広島から世界へ」と題されたこの文書の冒頭には、「このような悲劇が決して繰り返されないようにするために、広島歴史と人類への影響を誰もが真に理解するようにしていく必要があります。被爆者の経験を受けとめることによるのみ、私たちは平和な未来を共に築く方法を十分理解することができるのです。」と記されています。すなわち、これは、彼らの目線から、「私たちが今日どこに立ち、私たちみんなの未来をどのように展望しているか」を表しているものと思います。

《国際青少年バグウォッシュによる対話イベント》

4月25日、国際青少年バグウォッシュ (ISYP) が開催したオンラインイベントに招かれました。

ISYPの土台であるバグウォッシュ会議は、最初の会議が1958年にカナダのノバスコシア州バグウォッシュで開催されたのが名称の由来です。当時科学界をも分断していた冷戦に対抗して、世界中の科学者に科学と世界情勢について共に話し合おうと呼びかけ、世界平和に向けた活動を開始しました。

ISYPは、1970年代に活動を開始した、世界平和、特に核兵器の廃絶に向けて活動する多くの国々の大学生をメンバーとする、ドイツに拠点を置く青年組織です。

この対話イベントは、私の新しい本「グローバルヒバクシャ」(2022年イェール大学出版社)が提起した、「核兵器や核テクノロジーがもたらす非人道的な結末について対話する機会」として、トルコやナイジェリアのISYPリーダーによって企画され、ヨーロッパ、中東、アフリカ、アジア各地から若者が参加しました。

彼らは平和、核廃絶に関する問題、環境問題について非常によく学び、広く関与していました。多くのメンバーは、ロシアによるウクライナとの戦争における核兵器使用の可能性やドイツの原子炉停止による再生可能エネルギーへの転換について議論しました。

《広島G7ユースサミット》

ICANと広島大学は、4月下旬の3日間、広島でG7ユースサミットを開催しました。

各国から集まった50名の参加者の多くは、母国の様々な反核・平和組織、NGO、更には政府機関で活動しています。彼らは、このサミットに、「核問題に関する実態を踏まえた研修の受講とともに、他国や他の運動体の若い専門家との国を超えたネットワークを強化すること」を目的として、参加しました。

参加者は、有識者からの講演のほか、平和記念公園と平和記念資料館を訪れ、小倉桂子おぐらけいこさんの被爆体験証言を聴講しました。ある参加者は、「被爆について、データとしては知っていたが、小倉さんの証言や資料館の見学により核兵器のもたらす非人道的な惨劇を現実として実感した」と述べていました。

4月26日には、参加者のうち7名のG7各国代表が一般市民に語り掛けるイベント「核兵器のない世界に向けた若者の役割」が開催されました。松井市長による歓迎挨拶の後、参加者が地域活動を始めるまでの道のりや、広島にきた目的について語り、また、このサミットで得た経験を振り返りました。会議の最後に、「これから世界のリーダーになっていく者として、団結して、核兵器とその破滅的な結末から解放された安全な世界を達成することを決意する。」と誓い、G7広島サミットに出席する首脳たちに人類全体と地球の将来を守るための取組を要請する声明を発表しました。

私は、歴史家として、過去の出来事や残された重荷に滅入ってしまいがちですが、世界中の若いリーダー達の傍で、彼らのエネルギーを感じ、意見を聞くことはとても楽しい経験でした。今日の課題に対して、力強く新鮮な風が吹いているように感じました。平和の庭には新芽が芽吹いていました。



壇上の G7 各国の若者代表と筆者 (提供 ICAN)

ロバート・ジェイコブズ
広島市立大学 広島平和研究所、大学院平和学研究科の教授。アメリカの原子力科学技術の歴史に加え、世界の被爆者と核の遺産に関する問題に取り組んでいる。17年間広島に在住。

G7広島サミットジュニア会議

参加者が広島から世界に発した声

日本に在住するG7各国出身の高校生24名が、本年3月27日（月）から30日（木）までの間、広島市に集いました。

28日（火）には、平和記念資料館や本川小学校平和資料館の見学、原爆死没者慰霊碑への参拝・献花、被爆体験証言の聴講、平和記念公園内視察などの共通平和プログラムに参加



本川小学校平和資料館見学
(提供 広島サミット県民会議)

しました。多くの参加者は、初めて被爆の実相を目の当たりにし、「核兵器がもたらす非人道的な結末について世界中に共有し、次世代にも引き継いでいかなければならない」と発言していました。

また、「平和」、「持続可能性」、「多様性」の3つのテーマのグループに分かれて議論を重ね、29日（水）には、それぞれのグループがテーマに沿ったフィールド



グループディスカッション
(提供 広島サミット県民会議)

ワークに出かけました。そのうち、「平和」のグループは、大久野島の毒ガス資料館を訪れました。最終日には、成果文書を発表しました。

(成果文書)

<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/hiroshima-summit/junior-summit-final.html>



《参加者の声：平和について》

- ・原爆投下後の広島の悲惨な姿と、現在の美しい街並みを比較したとき、広島の人たちのように、私たちが力を合わせれば、どんなことも可能になるのだという希望を抱きました。
- ・平和のプログラムでは、日本に住んでいて、日本の平和教育を受けていても知らなかった戦争の事実を知ることができました。戦争の犠牲者は日本人だけでなく、どんな形であれ、戦争に関わるすべての人であると強く感じました。
- ・このプログラムで、原爆投下をはじめ多くのことについて学び、また、たくさんの異なる意見や考え方に触れ、より広い心を持てるようになりました。ま

た、自分が強く信じていることに自信を持てるようになりました。

- ・一番印象に残っているのは、日本は被害者であると同時に加害者でもあるということです。大久野島を訪れるまでは考えたこともありませんでした。この経験から、国際的な問題を考えるうえでは、さまざまな視点を持つ必要があると思いました。

《参加者の声：プログラム全体を通して》

- ・訪問した場所、そして何よりプログラムを通して出会った人たちとの交流から、多くの新しい知識を得ることができました。
- ・チームで思いを共有したり、知識を交換したり、アイデアを出したりするのは本当に楽しいことでした。そして、このプログラムを通じて、自分のコミュニケーション能力が向上したと思います。
- ・私たち一人一人が、それぞれのバックグラウンドによってどのように多面的に考えることができるか、知識と様々な考え方をどのように関連付けることができるか、そして、これらをどのように発展させればお互いを受け入れることができるかを学びました。
- ・私たちは未来に責任があるのだから、私たち若い世代は、国境を越えて語り合うことを続けなければならないと思います。

ジュニア会議参加者をガイドしたユースピースボランティアの印象

私は、ユースピースボランティア第1期生の丸川憂^{まるかわゆう}です。高1の時から平和記念公園を訪れる外国人観光客の方々に英語でガイドする活動を続け、今年で5年目を迎えます。最初の頃はガイド原稿を読むだけで必死でしたが、経験を通して、大切なことは自分の言葉で伝えることだと気づきました。今は自分で写真を用意して、相手に響くガイドをするよう心掛けています。

今回、4人のボランティアメンバーで、G7各国を代表する高校生達にガイドを行いました。高校生の皆さんはとても真剣にガイドを聞いてくださいました。移動の時にも質問があり、被爆の実相を積極的に学んでいる姿が印象的でした。その姿に触れ、ガイドをしている私たちも、原爆について更に学び続ける必要があると感じました。

今回の高校生達を含め、これまでガイドしてきた方々に、原爆について学んだことを少しでも周りの方に伝えていただき、平和への思いが広がることを願っています。これからもユースピースボランティアとして、一人でも多くの方に平和を発信していきたいと思っています。



ガイド活動を行う丸川さん



市民の声はG7首脳に届いたか

～ Civil 7を通じた政策提言の取り組み～

ピースボート 共同代表
畠山 澄子

〔はたけやま すみこ〕

ピースボート共同代表。被爆者と世界をまわる「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」に携わる。ケンブリッジ大学卒業、ペンシルベニア大学博士課程修了(科学史)。共著に『軍縮教育 ピースボートの方法論』[英語] など。

G7広島サミットが閉幕した翌日、私は広島から東京に戻る新幹線の中でこの半年間の出来事を思い起こしていました。市民の立場から行った数々の取り組みを、さてどう評価しようかしらと。

この半年間、私は外務省が運営する「C7 (Civil 7 / 市民7)」というプロセスを通して、市民社会の立場からの政策提言づくりに携わりました。C7はG7サミットに先立ち設けられるプロセスで、議長国が市民の声を取り入れる仕組みとしてあるものです。議長国への提言を行うプロセスに携わる、いわゆるエンゲージメントグループは、C7以外にもあります。ビジネス界のメンバーから成るBusiness 7 (B7)、科学者から成るScience 7 (S7)、若者から成るYouth 7 (Y7) などです。C7ではワーキンググループと呼ばれるテーマ別の作業部会に分かれて政策提言をまとめ、それらをさらにまとめたものをひとつの政策提言書として議長国に手渡すのが通例です。

今年のC7では、去年のC7から引き継がれた「気候と環境正義」「公正な経済への移行」「国際保健」「人道支援と紛争」「しなやかで開かれた社会」という5つの作業部会に加え、新たに「核兵器廃絶」という作業部会が新設されました。昨今の国際情勢や開催地を踏まえて核問題がひとつの大きなテーマになることが予想されていたためです。私は核兵器廃絶国際キャンペーン (ICAN) のスージー・スナイダーさんとともに、核兵器廃絶作業部会のコーディネーターを務めました。4か月にわたって英語で3回、日本語で2回、さらにその合間にメールでのやりとりを重ね、国内外の125の団体に政策提言をまとめました。被爆者団体や広島の市民団体からも多くの参加があり、広島平和文化センターのジャクリーン・カバツン専門委員もこのプロセスに参加されました。会議でのやりとりからは、一歩でも二歩でも核兵器廃絶に近づくことのできるようなG7にしたいとの参加者の真剣な思いが伝わってきました。参加者の願いと具体的な提案を首脳らに届く形でまとめたいと、適切な表現や文言を最後まで模索しました。

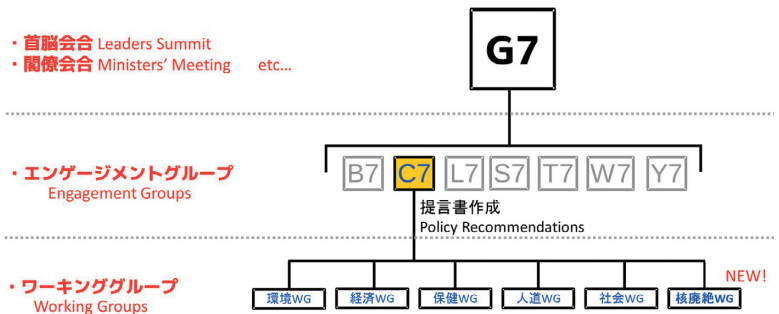
提言では、G7首脳に被爆者から直接話を聴き、核兵器の使用が人々や環境にもたらす被害を認識することを求めた上で「全ての核兵器使用の威嚇の明確な非難」「核兵器廃絶のための具体的な交渉の計画」「核兵器禁止条約への積極的な姿勢、核被害者援助と環境修復への尽力」「新STARTの後継条約の交渉の支援」「核のリスクを低減するための措置」「ユースのための軍縮教育の重要性」などを最終成果文書に盛り込むことを求めました。4月12日にはC7のメンバーが首相官邸を訪問し、岸田首相に政策提言書を手渡しました。

その直後に広島で開催された「みんなの市民サミット2023」では、より広くこの提言書について知ってもらえるよう、分科会で核兵器廃絶作業部会の取り組みと提言の内容を紹介しました。また、ピースボートが国際運営団体を務めるICANとしては、「広島G7ユースサミット」や「核兵器廃絶に向けたG7国会議員フォーラム」を開催して世界中の若者や国会議員らにこの政策提言書の内容を各国首脳にアピールしてもらうよう呼びかけました。

こうして迎えたG7サミットでは、G7首脳が揃って平和記念公園を訪れ、資料館を訪問し、被爆者と面会しました。私たちが提言を通して訴えた被爆の実相に触れてほしいという点は、十分ではなかったかもしれませんが果たされました。一方、「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」と銘打たれた成果文書に、私たちの主張はほとんど反映されませんでした。核兵器廃絶や核兵器禁止条約といった言葉がなかっただけでなく、核抑止の肯定ともとれる文言が入ってしまったことは、とても残念でした。

私は今、それでも前を向き続けたいと感じています。市民としての声は上げ続けることが肝心です。歩みをとめないことが大事です。今回の取り組みを通じて、核兵器のない世界のための志を持つ多くの人と繋がりました。核問題に限らず、社会の諸課題に全力で取り組む人たちと出会い、勇気をもらいました。これを糧に、これからも政治家に声を届けるという取り組みを諦めずに続けていきたいと思っています。

エンゲージメントグループ・ワーキンググループ Engagement Groups & Working Groups



C7 代表による政策提言書の手交
(撮影 ソーシャルグッド/宿野部隆之)

被爆体験証言者、被爆体験伝承者及び家族伝承者の委嘱

本財団は、被爆の実相や平和への思いをさらに広めていくため、今年度、被爆体験証言者33名、被爆体験伝承者196名に加え、家族伝承者7名を委嘱しました。

被爆体験証言者には、2名の方が加わりました。証言者の平均年齢は86歳を超えました。平和への思いを伝えたいと活動を続け、自身の被爆体験を語っています。

また、証言者の被爆体験や平和への思いを受け継ぎ、伝えていく被爆体験伝承者には、37名の方が加わりました。修学旅行の団体などへの講話に加え、広島平和記念資料館 東館地下1階の特別展示室で毎日、日本語と英語による講話を行っています。

さらに、昨年養成をはじめた家族伝承者7名が、今年度から新たに活動を開始します。今回委嘱を受けた倉田直子さんは「被爆二世としての思いを語ることにためらいもあり、諦めようと思った事もありましたが、体験を語ってくれた母の思いを受け継ぎたいという気持ちが支えとなりました。これから家族伝承者として、戦争の愚かさ、原爆の恐ろしさを伝えていきます。」と語っています。家族伝承者は、資料館や学校などで、家族である被爆者から受け継いだ被爆体験や平和への思いを伝えていきます。

(平和記念資料館 啓発課)



委嘱書交付式の様子

「やさしい日本語」講座を開催しました

2月12日、19日、および26日に、「やさしい日本語」講座を、連続して開催しました。日本人・外国人合わせて32名が参加しました。

この講座では、従来、日本人の市民が「やさしい日本語」（外国人に分かりやすい日本語）を学んでいました。昨年度からは、共生の大切さを一層理解してもらうため、外国人の市民も参加して、「やさしい日本語」を用いて、一緒に地域のルールや防災について学んでいます。

第1回は、ひろしま国際センターの犬飼康弘氏から、「やさしい日本語」の概要と用法について学びました。

第2回は、広島市日本語教育コーディネーターの橋本優香氏から、「クイズ等を通して学ぶ地域のルール講座」として、ゴミ捨てについて学びました。

さらに、第3回は、広島大学准教授の小口悠紀子氏から、「LEGOで作る災害に強いまち」講座として、防災について学びました。

このうち、第3回の「LEGOで作る災害に強いまち」講座を紹介します。

講座では、防災で重要な物の名前や用語をカードゲームで学びました。例えば、「ポリタンク」や「ゲリラ豪雨」等です。災害に関わる言葉は、知らないと命に関わる場合もあるので重要です。講座では、グループごとに「やさしい日本語」で話し合い、丁寧に確認していきました。

その後、LEGOブロックなどを用いて、どんな人にもやさしい、ユニバーサルデザインの避難所の模型を作りました。日本人と外国人の参加者が、「やさしい日本語」で、「授乳室は奥がいいのでは」、「お祈り部屋が必要」等話し合いながら、協力して知恵を絞っていました。

そこで意外な気づきがありました。防災関係の用語には、カタカナ語が結構あります。皆さんは、外来語はカタカナで書くことが多いため、外国人にはカタカナ語が伝わりやすいと考えていませんか。実は逆で、カタカナ語を理解しづらい外国人が多いそうです。

外来語と言っても、英語由来、スペイン語由来、フランス語由来など様々です。それが日本語で発音されると、元の言葉が思い浮かばなかったり、その意味が分からなかったりします。また、そもそも、元の言語の意味とカタカナ語では意味が異なっていたり、外国語同士を混ぜ合わせた造語もあるからです。

講義の最後に、講師の小口氏が、ある留学生アンケートで、半数以上が「心配なときに相談できる日本人はいない」と回答していたことを紹介されました。「日本語を母語としない人は情報弱者となり緊急時に孤立しがちなので、ぜひ日頃から声の掛け合いを」と話されていたことが印象的でした。

また、講座に参加した日本人参加者からは、「外国人にとっては、普段日本人同士で使っている日本語ではコミュニケーションが難しいので、『やさしい日本語』が重要であることを実感した」、「『やさしい日本語』は心掛けて使わないと、つつい普通日本語に戻ってしまうが、講座を通して練習できた」といった感想がありました。

(国際市民交流課)



防災で重要な物の名前をカードゲームで学びました。

～ウチも、ワシも～

広島市民じゃけえ!

—広島でも急増しているネパールの方にお話を伺いました—

カマルさん（ネパール）

僕は広島市中区と西区でカレー店を2店舗経営しています。お店に立っている日もありますよ。

10年ほど前に日本に来て、最初は福岡で学生として勉強しました。日本の親切で丁寧な文化に触れて、日本にずっと残りたいと思ったので、アルバイトで生活をやり繰りしながら、日本語などを一生懸命勉強して、今では自分のお店を持つことができました。外国（日本）で暮らしていくには、自分の国と違って難しいこと、大変なことがたくさんあります。しかし、日本が好きなので、困難を努力して乗り越えながら暮らしています。

1年前にネパール人の妻も来日して一緒に暮らし始め、子どもが生まれたばかりです。妻は平和文化センターの入門日本語教室や、他のボランティアによる教室で勉強しています。短期間ではまだまだ日本に慣れないことがありますから、日本の人にも助けてもらえるとありがたいなと思います。

ところで、カレーはインドのものと思っている日本人が多く、それも正しいのですが、広島のカレー屋さんはネパール人の店も多いですね。出しているカレーのスタイルはインド寄りなんですけど…。和風の中華料理などと同様に、ジャパナイズされたインド風のカレーです。

でも、メニューをよく見てください。例えば「モモ」（水餃子のような料理）と言った、ネパールらしい料理を出している店もあります。また、僕の店ではネパールらしいカレーと付け合わせの「ネパールターリーセット」を提供しています。あまり汁がなくサラッとしたチキンのネパールスタイルのカレーや、アチャール（スパイスの効いた野菜の漬物）が味わえますよ。



みなさん、お腹がすいてきましたか？ では、カレー屋さんに行って、美味しいものを食べたり、スタッフ（ネパール人かな？）に話しかけておしゃべりを楽しんだりしてみてくださいね！

「広島市・安芸郡外国人相談窓口」をご利用ください

広島市と安芸郡4町（府中町、海田町、熊野町、坂町）に住む外国人市民のみなさんにご利用いただける相談窓口を開設しています。

スペイン語、中国語、ベトナム語、ポルトガル語、英語、フィリピン語で対応できる相談員が、行政機関への各種届出や困りごとの相談に応じます。

また、広島市へ引越してきた外国人市民のみなさんへ、広島市での新しい生活に関する情報を、相談員が提供します。

さらに、毎月第2金曜日の午後1時30分から午後4時まで、出入国在留管理局職員による出張相談も行っています。（事前予約制）

ぜひご利用ください。

【連絡先】

TEL (082) 241-5010

Email soudan@pcf.city.hiroshima.jp

【場所】

広島国際会議場3階 国際市民交流課内

【時間】

月曜日～金曜日の午前9時～午後4時

【対応言語】

スペイン語、中国語、ベトナム語、ポルトガル語、英語、フィリピン語ほか（フィリピン語は金曜日と第1と第3木曜日のみ）

【休室日】

祝日、8月6日、12月29日～1月3日

【URL】

<https://h-ircd.jp/guide/consultation.html>



「ひろしま留学生基金」にご協力を

本財団では、外国人私費留学生支援のため、皆様から寄せられた寄附金を「ひろしま留学生基金」として積み立て、その利息等により「ひろしま奨学金」を支給しています。しかし、昨今の金利低下により、財源は大変厳しい状態となっています。「ひろしま留学生基金」への皆様の温かいご支援をお待ちしております。

【基金へのご寄附に関するお問い合わせ】

（公財）広島平和文化センター 国際市民交流課
〒730-0811 広島市中区中島町1番5号（広島国際会議場3階）
TEL (082) 242-8879

「ひろしま奨学金」とは

広島市内の大学・大学院に在学し、かつ広島市内に居住する外国人私費留学生を対象に、昭和63年度（1988年度）に事業を開始し、毎年30人の留学生に奨学金の支給を行っています。